

日本人原爆被爆者における甲状腺がん：被爆後 60 年の長期的傾向[§]

Long-term Trend of Thyroid Cancer Risk among Japanese Atomic-bomb Survivors: 60 Years after Exposure

古川恭治 Dale L Preston 船本幸代 米原修治 伊東正博 徳岡昭治 杉山裕美
早田みどり 小笹晃太郎 馬淵清彦

要約

小児・思春期での電離放射線被曝による甲状腺がんリスクは、一般の関心を集めている。放射線に誘発される甲状腺がんリスクの長期傾向や被曝時年齢による変動を特徴付けるため、本研究は、日本人原爆被爆者の寿命調査対象者 105,401 人における 1958 年から 2005 年までの甲状腺がん罹患データを解析した。追跡期間中、対象者集団の中で 371 症例の第一原発甲状腺がん（直径 10 mm 未満の微小癌を除く）が確認された。線形線量反応モデルを用いて、1 Gy の放射線被曝に対する甲状腺がん過剰相対リスクは、10 歳時で急性被曝後の 60 歳時において、1.28 (95% 信頼区間: 0.59–2.70) と推定された。リスクは被曝時年齢と共に急速に減少し、20 歳時以降に被曝した人に対しては有意な甲状腺がんの上昇は見られなかった。20 歳未満で被曝した人の甲状腺がんのうち、約 36% が放射線被曝と関連していると推定された。過剰リスクの大きさは到達年齢の上昇（あるいは被曝後の経過時間）と共に減少したが、小児期での被曝に関連した甲状腺がんの過剰リスクは、被曝後 50 年以上を経てもなお存在するとみられる。

[§] 本報告書は *Int J Cancer* 2013 (March); 132(5):1222–6 (doi:10.1002/ijc.27749) に掲載されたものであり、その正文は同掲載論文のテキスト (英文) である。この日本語要約は、日本の読者の便宜のために放影研が出版社 (John Wiley & Sons, Inc.) の許可を得て作成したが、本報告書を引用し、またはその他の方法で使用するときは、同掲載論文のテキスト (英文) によるべきである。